

【研究区分：若手奨励研究】

研究テーマ：〈異域〉説話をめぐる総合的研究	
研究代表者：地域創生学部 地域創生学科 地域文化コース 准教授 目黒将史	連絡先：m-meguro@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：なし	
【研究概要】 現実にある世界に創作空間を重ね合わせるにより、新しい世界を創造していく〈異域〉説話を通して、現代の〈地域〉の問題を捉え直す試みである。〈異域〉も〈地域〉も、どこに軸足を立てるかによって変わっていく。いわば、〈異域〉と〈地域〉とは対照的な概念と言えるのではないだろうか。〈地域〉における多文化共生の世の中は本当に可能なのか、〈異域〉を捉え直すことによって明らかにできるのかを考察した。大きな成果として、『桜田薩琉軍記』を県立広島大学図書館に蒐集できた。今後詳細な分析を行っていく。	

【研究内容・成果】

1. 研究内容

島嶼国家である日本は東アジアにおける位置づけ、境界を模索していく中で、物語を利用し、新たな物語を創り出す。つまり、現実にある世界に創作空間を重ね合わせるにより、新しい世界を創造していく。本研究は、そうした叙述を〈異域〉説話としてどのように読解できるのかを問う試みである。

〈異域〉を考察する上で、具体的に朝鮮、琉球、蝦夷、天草という四つの地域を対象化していく。これらの地域は江戸中期以降、〈朝鮮軍記〉〈薩琉軍記〉〈蝦夷軍記〉〈島原天草軍記〉という異国合戦軍記の舞台として描かれる地域である。これまで異国として研究の俎上に上がってきたが、これらの地域を〈異域〉という視点からどのように問い直せるのか検討した。

〈異域〉は異国だけではない。〈異域〉の範囲は、どこに軸足を立てるかによって変わっていく。和歌に詠まれる名勝や地誌に描かれる地域にも、実地域と創造空間とが織りこまれて語られている。いわば現実にある空間が演出され、〈異域〉に昇華されていく。現実世界と創造世界とを行き来する様相の一端を、文芸作品から明らかにしてみた。

2. 研究成果

①『桜田薩琉軍記』について

県立広島大学図書館で蒐集した『桜田薩琉軍記』（25巻23冊、うち追加5巻5冊）は、完本として現存する唯一のテキストである。つまり、この資料の全文を見るためには、県立広島大学を頼らなければならないということになるため、紹介、公表することの意義は大きい。大部なテキストであり、全文の翻刻、撮影などには時間がかかるが、何らかの方法で県立広島大学蔵本として公開していく。まずは、『県立広島大学地域創生学部紀要』2号（2023年3月刊行予定）において、零本である立教大学図書館蔵本との比較分析を通して、紹介を行う予定である。

序に、「宝永七庚寅（1710年）冬十一月」とみえる。しかし、為朝を祀った舜天大神宮のことが記され（『和漢三才図会』（正徳2年・1712）の用例が早い）、また、程順則『六論衍義』のことがみえるため（『六論衍義』は程順則が宝永3年（1706）に清から琉球へ持ち帰ったもの。日本では、享保4年（1719）、島津吉貴から徳川吉宗に献上され、荻生徂徠の訓訳本（享保6年・1721）、室鳩巢の『六論衍義大意』（享保7



年・1722)の出版以降、一般に広まっていく)、序の年次の信頼性は乏しい。成立は、様々な観点から江戸後期以降と言っても差し支えないのではなかろうか。

年次の信頼が乏しいことで、この資料の価値はそこなわれない。問題は、なぜこの時期に〈薩琉軍記〉のような異国合戦物が必要とされたのかである。それを解明するためにも県立広島大学図書館所蔵本の価値は非常に高い。

貸本屋とおぼしき押印(丸墨印)がある。印記「仙台/山上/桃生/長面浜/高橋屋」、「桃生/長面浜」は現石巻市長面(旧宮城県桃生郡河北町・旧々大川村)。



※『桜田薩琉軍記』とは？

これまで立教大学蔵本のみが確認されていた。巻頭にみえる樋口文友の序において、「蓋シ此軍記ハ桜田備中ト琉球千里山盃亀霊ト相撰テ一部トナセル者也」とあり、桜田常種(序の中に名前が記される)と盃亀霊(諸本「孟亀霊」、「孟」と「盃」の誤読)とが、ともに作成に関わったとされる。盃亀霊は〈薩琉軍記〉で創作された架空の武将であり、桜田常種も他諸本に登場しない人物である。よってテキストは、桜田備中守という人物に仮託された偽書(擬書)であり、『薩琉軍談』など初期型テキストを踏まえた増広本として位置づけられる。書名は外題、内題ともに「薩琉軍記」とあるが、「薩琉軍記」とすると他諸本との判別がつかなくなるので、『桜田薩琉軍記』と名付けることにする。

【参考文献】

目黒将史『薩琉軍記論 架空の琉球侵略物語はなぜ必要とされたのか』文学通信、2019年

②〈異域〉と〈地域〉との関連性について

本研究に関わる報告を、目黒将史「〈異域〉から地域を考える」(『異文化交流文学史ニューズレター』2、科学研究費助成事業基盤研究(B)「16世紀前後の日本と東アジアの〈異文化交流文学史〉をめぐる総合的比較研究」(研究代表者、小峯和明、20H01236)発行、2022年3月、p.25～p.28)で行った。キリシタンや蝦夷などに対する表現史を認識しておく必要性があり、実際に差別的な表現が用いられていること、それらの表現史の分析から逃げずに向き合うことこそ現代における多文化共生への一歩となるだろうことを説いた。地域における課題解決研究において、文学研究から何が訴えられるのか。解決までにはいかずとも、〈異文化交流文学史〉には、その問題を提起する可能性を秘めているのではないかということを提議した。課題に対するある一定の解答ができたと考えている。

島原天草の乱は宗教戦争としての一側面をもつ。ここに描かれるのは、仏教対キリシタンの争いであり、そこに自分と異なるもの(他者)を侮蔑する表現がなされていると言える。さらにキリシタンと琉球とが結び付いていく。キリシタンをめぐる造形として、謀反人との戦いと異国琉球イメージとが重ね合わされている。つまり、琉球とともに天草が描かれ、〈異域〉としての「天草」が形成されているのである。

この〈異域〉の分析を通して、〈地域〉の問題を捉え直すことができるのではないだろうか。自分と異なる者(他者)への視線は、時に差別的になる。現在、世界各地における宗教を根本にした争いが起こっている。それは、国としての問題だけでなく、共同体、個人の問題、いわば地域の問題であり、簡単に解決できる問題ではない。

地域における多文化共生の世の中は本当に可能なのだろうか。世界に目を向けると戦争の絶えない現状がある。このような状況を文学研究からどのように伝えることができるのか。今後とも、平和都市「広島」から発信していきたい。